

男子体操競技における跳馬の2017年から2020年版採点規則の変遷と動向 — 第47回世界選手権大会種目別決勝に着目して —

Changes and trends in scoring rules for the vault in men's gymnastics from 2017 to 2020

尾 西 奈 美

Nami ONISHI

I. 緒 論

競技スポーツにおける採点規則の移り変わりは早く、体操競技においてもオリンピックの翌年に4年サイクルで改定が行われている。現在では競い合う技の高度化により、A難度～I難度の難度が承認され、個々に0.10点から0.90点までの価値点が与えられるようになった。「10点満点」や「ウルトラC」などの有名な言葉はもはや過去のものとなり、技術は進化している。

体操競技は、技術の進歩に対するものと、複数の技を速やかに採点することに対するものである。「速さ」「高さ」「距離」を時計やメジャーで計測する競技とは異なり、人(選手)の演技を人(審判員)が評価する為主観の入る余地が全くないとは判断できない。したがって、演技の共存を目的とする競技の公平さを保つためにより客観的な評価をする上での細分化された「採点規則」が存在する。

男子体操競技は、ゆか・鞍馬・つり輪・跳馬・平行棒・鉄棒の6種目により構成されている。各種目における得点は、すでに定められている採点規則に基づき審判員が、その演技のできばえ(美

しさ・正確さ・難しさ)によって評価し、採点し決定される。すなわち、体操競技は、視覚的にその演技を審判にどのように見せるかが得点に大きく影響する競技であるといえる。

昨年までの公式試合に於いては、2013年版採点規則が適用されていた。技の進化が凄まじい今日、2016年のリオジャネイロオリンピックの跳馬では日本の白井健三選手が、自身の持つシライ／キムヒフン(伸身ユルチェンコ3回ひねり跳び)にもう半分ひねりを加えた、伸身ユルチェンコ3回半ひねり跳びを成功させ、シライⅡと承認されたのは記憶に新しい。

また、2016年リオジャネイロオリンピックが終わり、国際体操連盟(FIG)男子技術委員会において採点の基準が改定された。今年度より2017年版新採点規則が適用され今日、演技全体を通して芸術性と多様性に富んだ演技が求められるようになり、男子スポーツ種目の特性としてその技術と芸術性を一層表現できるようにしなければならぬ。

そこで本研究では、男子の跳馬を中心に、ルール改定に基づいた2013年版採点規則と2017年版新採点規則を比較し、どのような演技が求められ

ているのか、また、選手はどのような演技構成で挑んでいるのか、工夫が成されているのかを映像によって分析し、客観化して、採点規則における改定内容の変遷とともに跳馬の採点部分に焦点を当て、今後の動向と問題点を探ることを目的とした。

II. 研究方法及び対象者

本研究の対象種目とした跳馬について、2013年度版採点規則と2017年度版採点規則を比較し、調査する。跳馬の演技構成については、第47回世界選手権大会種目別予選の出場者総勢45名の中から決勝に選出した上位8名の演技構成を映像により分析・検証し、2017年版採点規則と選手の動向を照らし合わせながら進めていく。時代とともに移りゆく体操競技採点規則の変遷を調査し、考察する。

III. 体操競技の跳馬について

体操競技の跳馬の演技について、選手は団体総合予選・決勝、個人総合決勝においては、1つの超越技を実施しなければならない。また、種目別予選・決勝においては、異なったグループで、かつ異なった第二空中局面の2つの超越技を実施しなくてはならない。跳馬の演技は助走で開始され、跳躍版は両足を揃えて踏み切られ、両手の瞬時の突き放しをもって実施される。超越技は、体の2つの軸を中心とした1回、またはそれ以上のひねりや宙返りを加えることができる。種目別予選及び決勝においては、1回の超越技が実施された後、選手は速やかにスタート地点に戻り、D1審判員の合図で2回目の超越技を実施する。

跳馬は1972年のミュンヘンオリンピック大会より、一発勝負の種目となった。

種目別選手権では、演技が2回実施されるがそれぞれ異なった2種類の技を連続して演技しなければならない。1つの技についての演技は1回の

みなので、1回のチャンスにける選手の心労は計り知れない。演技時間が他種目に比べてあまりにも短いため、特に着地に神経を集中させることになる。1962年の世界選手権大会（プラハ）では、着地の際、1歩前に出るのは、空中姿勢が雄大であることの結果だから減点はしないという時期もあったが、実際には何が雄大かという判断が難しく、着地の際に1歩でも動いた方がやはり審判員に対する印象が悪く、減点されたと言われている。男子体操競技の6種目の中で、跳馬は一発勝負の種目として特に選手には大きなプレッシャーとなるが、与えられたただ一度のチャンスを確実に捉えるために選手は挑戦してくる種目とも言えよう。

跳馬の各跳越技は、グループごとに分類されており、それぞれの跳越技番号と価値点が難度表に記載されている。

G I 前転跳び系

G II 第一局面で1/4または1/2ひねり跳び系

G III ロンダート入り系

G IV ロンダートから1/2ひねり着手

G V ロンダートから3/4あるいは1回ひねり着手（シェルボ入り）系

加えて次の一般原則が適用される。

- 1) クエルボとびは前転とび前方宙返りひねりと同格である。
- 2) カサマツとびは等価値のツカハラとびと同格である。
- 3) ユルチェンコとびは、類似したツカハラとび、あるいはカサマツとびと同価値である。
- 4) 他に記載されていない限り、ロンダートから1/2ひねりを加えて着手する技は、類似した前転とび系の技よりも0.20高い価値を有する。
- 5) 他に記載されていない限り、ロンダートから3/4または1回ひねりを加えて着手する技は、類似したカサマツとび系の技よりも0.40高い価値を有する。

6) 片手着手で実施された演技は、両手で行われたものと同一の技とみなされる。

各跳越技は、それぞれの難しさに基づいて価値点が決定されている。

演技に先立って、採点規則の難度表から該当する跳越技番号を、D審判へ表示しなければならない。表示は選手または補助者によって行われる。表示ミスの場合は減点がない。

これらの内容を踏まえて、選手は自身にあった跳越技を選択していく。

IV. 2013年版と2017年版規則集の改定について

Dスコア (Difficulty) について、2017年度版採点規則は、2013年度版採点規則価値点と比較すると跳馬の価値点は全サイクルよりも全体的に-0.4~0.8下がっている。また、ツカハラ・カサマツ・ユルチェンコのかかえ込み宙返りと屈身はさらに価値が下がっている。また、宙返りなしの超越のひねりは、1/2ひねりが増えるごとに+0.2価値点が上がり、ロングートから3/4または1回ひねりを加えて着手する技は、類似したカサマツ系の技よりも+0.6高い価値を有する。

一方、2017年版ではヤマシタ系と片手で着手する技が削除された。「ヤマシタとび」とは山下治広選手(現松田)が1962年、第15回世界選手権大会で初めて発表した技である。この跳躍が演技されたとき、その雄大さと着想の素晴らしさに競技関係者も観客も思わずみとれてしまったと言われている。「ヤマシタとび」の特徴は、着手の後、屈身体勢のまま跳躍の高さを強調することにあり、いかに雄大な空中姿勢を生み出すかに美しさと雄大性を求めた。

2013年度版では104技あった技が、2017年度版では99技に絞られている。体操競技の演技は、規則集に掲載されている中で構成される。掲載されていない技を行うときは事前に新義申請をしなければ評価の対象とはならない。ヤマシタとびの

削除や片手や屈身系の技が削除され、また、新しく高難度の技が加わったことで精査され99技に絞られたと考えられる。近年では公式試合に於いて「ヤマシタとび」系を実施する選手はほとんどいなかった。また、第2空中局面の際に屈身姿勢でひねりや宙返りを加えた技を実施している選手もほほいない。日本の歴史を作った基本技とも言えるが、技の進化・器具器械の進化により、技の内容も変化している。高難度の技が凄まじく進化していることは、規則集を通じて理解できる。

1) 難度についての比較 (Difficulty)

A) 基本的にはすべての跳馬の価値点は前サイクルよりも0.40低くなった。

①ツカハラ、カサマツ、ユルチェンコのかかえ込みや屈身は、さらに価値が下がっている。

②前転とび、側転とび1/4ひねりの技は、1/2ひねり増えるごとに+0.2

③グループVは、類似したカサマツ系の+0.6

B) 削除された技

①片手で着手する技

②ヤマシタ系の技

C) 新技



伸身ユルチェンコ7/2ひねり (シライ2) = 6.0 (Ⅲ-77)



伸身カサマツ5/2ひねり
(伸身ツカハラ7/2ひねり) = 6.0 (Ⅱ-77)

V. 跳馬特有の減点と着地の減点について

跳馬の特有な減点については、施行当初から変化はない。すべての跳越技には跳躍の番号が付けられており、選手は演技を行う前にその跳躍番号を審判に表示するが、表示と異なる跳越技を実施した場合でも減点はない。

採点の際に美的・実施欠点による減点項目の中で着地に関する減点項目は大きくウエイトを占めている。実施の際、着地のミスで多くの選手が悔いを残してきたのも少なくない。跳躍ではその着地方向についても減点が行われる。2006年までは着地方向の減点の目安として跳躍台の中心より左右それぞれ50cm幅の位置を定め、その位置か

表1 D審判の減点

欠点	小欠点 0.10	中欠点 0.30	大欠点 0.50
片足または片手が着地エリアの外に触れる、または着地する	決定点から0.10		
両足、両手、片足と片手、身体のほかの部分 が着地エリアの外に触れる	決定点から0.30		
着地のエリア外に直接着地する	決定点から0.30		
25mを越す助走	決定点から0.50		
禁止技	D・E両審判0.00		
ロンダート技においてセフティ・カラーを使用しない	D・E両審判0.00		
種目別予選・決勝で最初の技を繰り返す	D・E両審判0.00		
種目別予選あるいは決勝で2回目の跳越技を 同じ第二局面の技で実施する	決定点から2.00の減点		
助走をやり直す	1.00		

表2 E審判の減点

欠点	小欠点 0.10	中欠点 0.30	大欠点 0.50
第一局面の実施欠点	+	+	+
第一局面の技術欠点	+	+	+
倒立位を垂直に通過しない	+	+	+
第二局面の実施欠点	+	+	+
第二局面の技術欠点	+	+	+
高さ不足：上昇が見られない実施	+	+	+
着地の準備としての身体のみらきが見られない実施	+	+	

ら進行方向に4mの長さで直線レーンを引き着地方向の減点を行っていた。しかし、2008年から跳躍台の中心より45cmの地点から着地マットの長さ6m地点に於いて各々75cm地点を終点とする放射状のレーンが採用されている。

跳躍の第2空中局面では高さや飛距離が出るほど身体の軸がぶれる傾向にある。直線に設置されたレーンでは高さや飛距離が出ない選手の方が既定の枠内に着地することが容易で減点も少ない。従ってこの着地の減点は、第2空中局面での高さや飛距離、更に正確性を出す選手の価値を大きく評価するという背景があったと考えられる。更に第2空中局面から着地に対する減点が厳密化され、完成度の高い安定した跳躍と高い着地姿勢が要求されたことを意味している。第1空中局面において正確な入り方を実施すれば支持局面での確実な突き手と鉛直面での身体の通過が可能となり、第2空中局面における高さや跳距離を伴う正確な着地地点も保証される。これらのことから、採点する側は実施する側に対して更なる技の完成度と雄大性のある跳躍を望んでいると推測する。

VI. 演技構成について

2017年10月2～8日、カナダ・モントリオールで開催された第47回世界選手権大会種目別跳馬の決勝の演技内容と結果を考察する。種目別予

選・決勝においては、異なったグループで、かつ異なった第2空中局面の2つの超越技を実施する。出場選手は2本ともに5.2～6.0の高い価値のある超越技を実施している。

種目別跳馬決勝に於いて、他選手のミスがあったものの、着地のまとめ方が素晴らしかった白井選手が優勝した。2位のRADIVILOVとの差がわずかに0.001ということで僅差中の僅差の争いを制した。2位のRADIVILOVは着地の一歩が悔やまれ、Dスコアよりも、Eスコアが勝敗を分けた。3位のKIMはYANGの後を継ぐ形で、韓国得意の跳馬でメダルを獲得した。以上の結果より、より高難度の超越技でDスコアを獲得することと、実施の際の正確さ・雄大さ・美しさを表現し、さらに着地に於いていかに良い姿勢で止められるかが重要な課題になることが示された。

VII. 結果・考察

本研究では、男子の跳馬を中心に、ルール改定に基づき2013年版採点規則と2017年版新採点規則を比較し、どのような演技が求められているのか、また、選手はどのような演技構成で挑んでいるのか、工夫が成されているのかを映像によって分析し、客観化して、採点規則における改定内容の変遷とともに跳馬の採点部分に焦点を当ててみた。

表3

欠点	小欠点 0.10	中欠点 0.30	大欠点 0.50
着地で脚を開く	肩幅以下	肩幅を超える	
着地でぐらつく、小さく足をずらす、手を回す	+		
不安定な着地	1歩につき0.10	大きく1歩、とび、手が触れる	
着地で転倒する、または片手、両手でゆかを支える			1.00
足からの着地がみられない			1.00 (難度不認証)

Results

Rank	Name	NOC		D Score	E Score	Pen	Vault	Total
1	SHIRAI Kenzo	JPN	1	5.600	9.600		15.200	14.900
			2	5.200	9.400		14.600	
2	RADIVILOV Igor	UKR	1	5.600	9.433		15.033	14.899
			2	5.600	9.166		14.766	
3	KIM Hansol	KOR	1	5.600	9.366		14.966	14.766
			2	5.200	9.366		14.566	
4	DRAGULESCU Marian	ROU	1	5.600	9.100		14.700	14.716
			2	5.400	9.333		14.733	
5	VEGA LOPEZ Jorge	GUA	1	5.600	9.200	-0.1	14.700	14.704
			2	5.200	9.508		14.708	
6	ASATO Keisuke	JPN	1	6.000	8.866	-0.1	14.766	14.349
			2	5.600	8.333		13.933	
7	HRIMECHE Zachari	FRA	1	5.600	8.166	-0.2	13.566	14.083
			2	5.600	9.000		14.600	
8	DALALOYAN Artur	RUS	1	5.600	8.900	-0.3	14.200	13.966
			2	5.600	8.133		13.733	

跳馬に関しては新技が増え、容易な技は削除された。技は時代に伴い凄まじく進化している。また、観客を魅了する一方、空間や高さが必要となる分、着地の衝撃が大きく、タイミングが合わなければ危険で、怪我リスクが高くなるのが懸念される。世界選手権やオリンピックの場面でも選手が着地の際に怪我をしてしまう時がある。選手は安定性はもちろんのこと、最大限の集中力と精神力が必要となる。器具や器械そのものの質は良くなったが、より安全性を考慮した部分では、今後の課題になると考える。

技のEスコア（できれば）は、雄大性、美しさ、着地を止めることで大きく評価される。

「美しい体操」をより昇華し、「魅せる体操」を体現できるようにすることが必須である。そのためにはDスコアを向上させながらも、減点のない捌きだけで満足するのではなく、細部にわたる動

きの表現までも工夫し、味わいや深みを醸し出し、観衆を魅了し感動を与える演技の追及が必要となるであろう。

2020年には東京オリンピックが開催され、さらなる盛り上がり期待される。今後は現場のコーチや選手も積極的に技への挑戦と技術開発を進めていこう。

- ①安定した演技実施を基盤に、美しさ、力強さを表現し減点のない動きだけでなく、魅せる捌きの推奨
- ②高められたDスコアを有する演技
- ③着地への準備局面を有し意識的に静止に持ち込められる終末技

B) 跳馬の種目特有の評価

- ①安定感、確実性のあるDスコア5.6以上の跳越技
- ②準備局面を示した意識的に静止に持ち込める

跳越

- ③空中局面での膝まがり足われに対して、美しい超越
- ④カサマツ系での垂直面からの外れない超越

本研究は、平成29年度国土舘大学体育学部附属体育研究所研究助成金を受けて実施した。記して感謝の意を表したい。

引用・参考文献

- 1) 金子明友：体操競技のコーチング. 大修館書店, 1974.
- 2) 金子明友, 朝岡正雄編著：運動学講義. 大修館書店, 1990.
- 3) 金子明友：わざの伝承 明和出版, 2002.
- 4) マイネル, K：スポーツ運動学. 大修館書店, 1981.
- 5) 峯岸昌弘：新型跳馬の出現にともなう着手技術の変化について. 研究部報第88号(財)日本体操協会, P.51-57
- 6) 水島宏一：日本体操の現状と課題 世界の体操競技の課題. 日本体操競技・器械運動学会16号, P.49
- 7) 中村絵理, 尾西奈美, 堀内担志：女子体操競技における2006年から2009年版採点規則の変遷とその動向. 九州共立大学スポーツ学部研究紀要No.4, P.47-51
- 8) 中村絵理, 尾西奈美, 堀内担志：平均台における採点規則の変遷に関する一考察—2006年～2009年版を中心として. 九州共立大学スポーツ学部研究紀要No.5, P.51-60
- 9) 財団法人日本体操協会：採点規則男子2009年版. 広研印刷株式会社, P.104-119
- 10) 公益財団法人日本体操協会：採点規則男子2013年版 広研印刷株式会社, P.121-141
- 11) 公益財団法人日本体操協会：採点規則男子2017年版 広研印刷株式会社, P.6-31 124-147